

そこで内供は日毎に機嫌きげんが悪くなった。二言目には、誰でも意
地しか悪く叱りつける。しまいには鼻りょうじの療治をしたあの弟子の僧で
さえ、「内供は法慳貪ほうけんどんの罪を受けられるぞ」と陰口をきくほど
になった。殊に内供を怒らせたのは、例の悪戯いたづらな中童子であ
る。ある日、けたたましく犬ほの吠える声がするので、内供が何
気なく外へ出て見ると、中童子は、二尺ばかりの木の片きれをふり
まわして、毛の長い、痩せた尨犬や むくいぬ おを逐いまわしている。それも
ただ、逐いまわしているのではない。「鼻を打たれまい。そ
れ、鼻を打たれまい」と囁はやしながら、逐いまわしているのである。
内供は、中童子の手からその木の片をひったくって、した
たかその顔はなもたを打った。木の片は以前の鼻持上げの木だったので
ある。

内供はなまじいに、鼻うらの短くなったのが、かえって恨めしく
なった。

するとある夜の事である。日が暮れてから急に風が出たと見
えて、塔の風鐸ふうたくの鳴る音が、うるさいほど枕かよに通って来た。そ
の上、寒さもめっきり加わったので、老年の内供は寝つこうと
しても寝つかれない。そこで床の中でまじまじしていると、ふ
と鼻かゆがいつになく、むず痒いのに気がついた。手をあてて見る
と少し水気すいきが来たようにむくんでいる。どうやらそこだけ、熱
さえもあるらしい。

——無理に短うしたで、病が起ったのかも知れぬ。

内供は、仏前に香花を供えるような 恭^{こうげ}しい手つきで、鼻を
抑えながら、こ^{そな}う^{うやうや}呟いた。

翌朝、内供がいつものように早く眼をさまして見ると、寺内^{きん}
の銀杏や橡が一晩の中に葉を落したので、庭は黄金を敷いたよ
うに明るい。塔の屋根には霜が下りているせいであろう。まだ
うすい朝日に、九輪^{くりん}がまばゆく光っている。禅智内供は、蔀^{しとみ}を
上げた縁に立って、深く息をすいこんだ。

ほとんど、忘れようとしていたある感覚が、再び内供に帰っ
て来たのはこの時である。

内供は慌てて鼻へ手をやった。手にさわるものは、昨夜の短^{ゆうべ}
い鼻ではない。上唇の上から顴の下まで、五六寸あまりもぶら
下っている、昔の長い鼻である。内供は鼻が一夜の中に、また
元の通り長くなったのを知った。そうしてそれと同時に、鼻が
短くなった時と同じような、はればれした心もちが、どこから
ともなく帰って来るのを感じた。

——こうなれば、もう誰も晒^{わら}うものはないにちがいない。

内供は心の中でこう自分に囁^{ささや}いた。長い鼻をあけ方の秋風に
ぶらつかせながら。

Read by Yumi Boutwell 6-5-08

Text from http://www.aozora.gr.jp/cards/000879/files/42_15228.html

底本：「芥川龍之介全集1」ちくま文庫、筑摩書房 1986（昭和61）年9月24日第1刷発行 1997（平成9）年4月15日第14刷発行 底
本の親本：「筑摩全集類聚版芥川龍之介全集」筑摩書房 1971（昭和46）年3月～1971（昭和46）年11月 入力：平山誠、野口英司
校正：もりみつじゅんじ 1997年11月4日公開 2004年3月7日修正 青空文庫作成ファイル：このファイルは、インターネットの図
書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。